

序文

MDCT利用による診断

高橋 昭喜

Guest Editor

マルチスライスCT(MDCT)が市場に出て数年がたち、その優れた有用性が一般に認識されてきている。CTを導入せんとする施設はすべからずMDCTを考慮するし、装置そのものも絶えず進化して当初の4列から8列、16列と多列化がますます進行しつつある。

さて、当院ならびにその関連施設においてもMDCTが導入されてきており、その学問的成果も多少生まれてきた。編集委員長でいらっしゃる町田喜久雄先生からのご依頼で、その成果の一端を本誌に掲載させていただくことになり、当院または関連施設でMDCTを手がけている若手の医局員たちにその利用経験をまとめてもらった。未熟な点も多々あると思われるが、現場の方々に多少なりともお役に立てればと願う次第である。

MDCTの利点は今更言うまでもないが、耳学問で得た知識から思いつくまに列挙してみると、「短時間で広範囲が撮れる」ことから患者さんの息止めという負担が軽減し、同時に体軸方向でもaxial断面に劣らない量のデータすなわち「等方性ボリュームデータ」が得られ、これが種々の診断能向上に貢献するものと思われる。その他、様々な方向からの単純X線像として再出しできるなど、種々の新しい利用法の可能性があり、「CTとしても使える新しいX線撮影装置」と表現する方もおられる。その一方では大量のデータ発生などの問題が生じているが、これはフィルムレス化に向かう原動力になっていると思うし、同時にX線被曝の問題がクローズアップされてきている。

このような種々の問題点が解決され、また患者さんの負担を軽減しつつ、その特質を生かしたさまざまな新しい利用法の開拓によって更に放射線診断が発展するよう祈って、序に代えさせていただく。

(東北大学医学部放射線診断科教授)